

たときにお目にかかったことがあるので、^{ずうずう}図々しくも頼み込んでみよいかと思ってお伺いしたら、応待してくれたのは野呂儀兵衛さん（故人）であった。

来意をのべ、暫く待たされたが、某日午後一時から二時間、田畑裏のある部屋だけ、人数は七、八人位。お茶以外飲食はしない。という条件でお借りすることができた。

当日、田中君と私の呼びかけで参集したのは六名ほどだったと思う。太宰の幼い頃のお話を聞くため、山源の向い側に住む鳴海和夫先生（故人）をお願いしていた。鳴海先生は五所川原農林高校金木分校教諭で、太宰とは幼少の頃の遊び仲間であったと聞いている。

広い土間に下駄の音を響かせて、「ヤァー」と声をかけ、鳴海先生は田畑裏の端に上ってきた。田中君が「先生、どうぞこちらへ。」と座布団を横座に敷き直して迎えた。

「このシボド（田畑裏）の前サ座るのは初めてだなア」と出席者の顔を見まわした。私たちは「ドウモ」とペコリと頭を下げた。田中君以外は初対面である。

国語の先生だと聞いているので、気むづかしい方じゃないかと想像していたが、気さくな、メガネをかけた紳士、それで津軽弁で語りかける。ということでも雰囲気がなごやかになり、太宰の小さい頃の話聞かせてほしい、と頼んだ。

鳴海先生は太宰より二つ年下で、「修治さん（太宰）は、山源のオンチャと言っても、我々から見れば王子様のような生活

でしたね。」

——ご両親は共に津軽藩の士族の家に生れた医師であったが、明治四十四年四月、太宰の父で当時県会議員津島源右衛門氏や時の金木村長今平次郎氏らの要請で、県立病院金木分院の後に鳴海病院を開院した。このような家柄に育った和夫氏も厳しく躰^{しづ}られていて、新興大地主の家で贅沢に暮す太宰とは生活の違いに何か親しみ方が違っていたのではないだろうか。

当時の子供たちの遊びといえば、チャンバラごっこ、陣取り、木登り、ビタ打ち（メンコ）、冬にはスキー、ズグリ廻し、雪ダルマづくり雪合戦など、ほとんど外での遊びが多かった筈なのに、和夫先生の口から太宰との外での遊びのことには一言も出てこなかった。

太宰の作品で昭和十年代に書かれた『雀こ』について面白くオカシク話してくれたが、（当時私はこの小説を読んでいなかった）津軽弁で書いた唯一の作品だ。と言われたことが頭の隅に残っていたが、話の内容がどうしても思い出せずに居たものです。それが、五十年も経った今年の冬（平成12年2月）に和夫先生の弟さんと、鳴海医院を継いだ健吉先生が、老齢のために医院を閉じ弘前へ移り住んでから、私宛に和夫先生の書かれた『金木について』という小冊子を送ってくれました。その中に「マロさまのこと」という「雀こ」の裏話しとでもいう一文が載っていました。私が、ハッキリ思い出せないけれど何か頭の中にモヤーと浮んでくる、はじめて山源の土間から上って田畑

裏端に座り、太宰を偲ぶ会で聞いたお話の内容が「これだっ」と膝を叩いて納得し、鳴海健吉先生（平成12年4月没）にお礼の手紙を書いて出した。

次にその一文を記してみる。

マロさまのこと

井伏鱒二氏に捧げられた太宰氏初期の短篇『雀こ』は津軽のことばで書かれた小品ですが、此の主人公はタキとマロさまであります。タキは後年の『津軽』を御覧下されば解る通り、太宰氏少年の頃のアダコ（子守女）です。少年の日を育てあげたタキの名儀は、後年の太宰氏にとって極めてなつかしい、近い名であったかと思いますが、こゝではタキと並んで書かれているマロさまに就いてお話致します。

『雀こ』の中では「たかまどのお寺の坊主^{ほんす}こで、からだつき細くてかそべない」云々とあります。確かにマロさまは金木のお寺の坊様でありました。然し体つきこ細くもなく、第一少年ではありません。太宰氏少年の頃既に立派な大人であり、色白で黒々とした髪の持ち主で、わけでも見事なのはその顎にかけての髯であり、又青みがかって特徴的な澄んだ眼でありました。要するにマロさまは、一個の美丈夫と申すべきでありましょう。もし現存せられれば、も早六十の坂を越えられて居るのではないかと思われま

田碁も仲々の腕前であったようであります。マロさまのお寺は太宰家の菩提寺でありましたから、マロさまは仏事其他で屢々^{しばしば}太宰家に入りされたに違いありません。少年の日の太宰氏にとって、家の人々全部に鄭重に扱われる美丈夫のマロさまは、まことに一個の英雄の如く印象深いものがあつたかに想像されます。

然し、此のマロさまは或日突然私たち否金木の村の人々の眼から永久に消え去ってしまいました。行方が知れないのであります。近くの酒屋の娘さんも同時に行方が知れなくなりしました。此の時以後誰も二人の姿を見た者がありません。今から三十五年程も前のことです。当然駆落の噂がもっぱらでした。然し誰もその確証を握っている者はありません。けれども平生人の出入の殆どない当時の金木で、突然二人の若い男女が行方知れずになるといふことはそれより外に考えようがないでしょう。事件の中心がお寺の坊様でしたから、眠ったような此の村に、暫く此の噂は華やかな話題を撒き散らし、やがて忘れられて行きました。

数年経って、京都でマロさまに会ったという人の話が後日譚として伝わっています。マロさまは、「芸が身を助ける」で、日頃習い覚えた田碁の師匠となって暮しを立て、居ったのです。会った人の名の伝わらぬところを見れば、これも単なる噂話に過ぎないかも知れません。私は、

その噂が真実であり、習い覚えた趣味の囲碁が、今は生活のたつきとなつて、好いた女人と細々ひっそりと平和な暮らしを続けられて居て欲しいと思いますが、少年の日の太宰氏が遭遇された此のマロさまの名が後年『雀こ』を書かれる時もおかつ心の片隅にタキの名と並んでなつかしく忘れられずに残つて居つたということは、まことに興味深いことでもあります。

附記

此の稿を書くに当つて、金木文化会一戸正三氏、金木中学校教頭外崎美智雄先生、同小学校田村雄三先生、商業大橋佐氏、医師鳴海健吉の諸氏の助力に寄つた。——中略
なお今も健在にして太宰氏を熱愛すること何人にも劣らぬ嘗つての太宰氏の恩師老伊藤慶三郎先生には、特に読んで頂きたく此の稿を捧げるものである。

(昭和二十七年十月)

鳴海和夫先生の小冊子には、マロさまのこと外に「別れの長靴」「消防股引」「夜食」「みづく」の便所に落つ」「豹の皮に寝ころび、自作のプロレタリア小説を朗読す」「新劇の公演—女学生變じて老婆と化す」が収録されており、表題は『金木町にて』である。

山源の家屋敷は昭和二十三年七月十九日時の町長角田唯五郎氏に所有権移転登記がなされている。

私たちのささやかな太宰治を偲ぶ会は、山源という金木地方

る木立さんは、輸送の貨車を一両だけ確保したが、一五十箱より準備ができてないから五十箱を一緒に神田市場へ出して見ないかと誘われ、両親に相談して出してみることにしたというわけである。汽車の切符(乗車券)の入手もなかなか困難な時代であつたが、木立さんが若い頃津鉄に勤めたことがあつて、その関係で顔が通つていたのである。二枚の切符には二個のツッキ(手荷物)がつく。リンゴ二箱をツッキで送つたその一つが太宰宅へ着いていた。

玄関に出てきた太宰の奥さん(美知子夫人)に招じられて、応接間であいさつした後、木立さんは「先ず先生に線香をあげさせてください。」と、案内されて仏前で手を合わせた。私もそれに従つて合掌した。その日は奥さんが一人在宅していたようで、木立さんの指示で私は到着していたワガ筵で包み荒縄をかけた。リンゴ箱を解いた。木箱のフタを開けるに苦勞したが、あまりモミガラをこぼすこともなく、奥さんの差し出された籠に箱の中から取り出したリンゴを入れてやった。

応接間のテーブルに置かれたリンゴ、ユキノシタ(国光)とセンナリ(紅玉)を奥さんは布でみがきながらいろいろな質問をした。

「リンゴ箱にどうしてモミガラを入れているんですか。」

「それは、運搬(運送)する時キズがつかないようにと野積みして置いた時凍みないように……」

そうなのかどうかは本当は私は知ってないのだが、何か一言

の最大の地主の邸宅での会合であり、一般人はなかなか土間から上にあがる事の出来ない場所に座ることができたのは初めてでありまた最後であつた。

それから数年後、七

十人ほどの会員があつた「灯」は第十九号まで発行して廃刊となり、田中君らと新しく呼びかけ北方文学研究会をつくり、機関紙「埋木」を発行したのは昭和二十七年であつたが、これは創刊号だけで終つた。

▽心安らぐ日々

省線電車(国電山ノ手線)を降りて、それほど長い時間は歩いてない。ゆるい坂の途中だったような気がする。

「ここだよ。」と木立さんはその家の前に立ち、「ここが太宰の奥さんが住んでる所だよ。」と言いながら案内を乞うた。

昭和二十五年の初冬だつたと思うが、その年はじめて東京神田の青果市場へリンゴを出荷して、どのようにリンゴが売られるのかを見学するため木立さんに付いて行つた。当時、私の家では三反歩(30坪)ほどのリンゴを作つていて、販売は庭先売りであつたが、その年は、一町三反歩のリンゴ園を経営してい

私もしゃべらなければならぬと思つて言つた。そのあと、木立さんは

「モミガラは稲の収穫後、脱穀もみずりすれば大量に出ます。それを精米所ではもて余しているのですが、よく出来たもので、リンゴ移業者が大きなリンゴ倉庫の外サクリ板と内板の間にモミガラをぎっしり詰めて保温し、冬の寒さを乗り越えて春先に出荷するのです……」

「リンゴを作る方たちも大変なんですね。喰べる時もよくそのご苦勞を味わつて喰べなきゃ……」

奥さんは、紅玉を三つほどテーブルの上に並べ、感じ入つたように見ていた。



外へ出てあたりを見回したら、電柱に小石川駕籠町の町名表示版があつた。(現在の文京区本駒込六丁目である。)

撰ばれてあることの

恍惚と不安

二つわれにあり

埋木

創刊號



北方文学研究会

芦野公園登仙岬に太宰治の文学碑が建ったのは昭和四十年（一九六五）である。

太宰の死後十七年経ってようやくにして故郷金木町に建った。昭和二十八年十月山梨県河口湖町御坂峠に富士には月見草がよく似合ふが最初で、昭和三十一年八月には青森県蟹田町観瀾山に「かれは人を喜ばせるのが何よりも好きであった正義と微笑より」が建てられたのは県内の一番目、すなおてかみさまのようないいこは青森市合浦小学校に昭和三十四年五月に、そして昭和四十年五月に金木町待望の文学碑が実現したのである。

地元での建立が遅れたのは、「故郷だけには建ててもらっては困る」と長兄文治氏が許さなかったからである。と当時の花田一町長（故人）は言う。御坂峠の文学碑除幕式に招かれて以来、生れ故郷へも文学碑をと考えていた花田町長は、その後町長選（昭和三十三年）で次兄の英治氏と争い、文治氏との対立となった。

五月三日の太宰碑除幕式には、友人で作家の檀一雄氏をはじめ約三百名の招待客らの見守る中で、太宰の次女里子（現作家津島佑子）さんと兄英治氏の孫恭一さんの手によって除幕。長兄の文治氏は『弟の修治にはいろいろなことがあったが、今、金木の皆さんがこうして心のこもった記念碑を建ててくれて、修治もほんとうに幸せものである。』とあいさつした。文治氏はこの式典において、未発表の資料（太宰が昭和十一年に文治

氏にあてた手紙Ⅱ現在太宰治記念館斜陽館に展示）を太宰碑建立委員会（会長花田一県会議員）に寄贈し、この手紙を太宰の幼少の頃からの友人で金木高校教諭の鳴海和夫氏が朗読した。

私は当時、町役場に勤めていて、役場職員の大半がこの式典のために動員された。私の係りは、除幕式を見ようと町内外から集った人たちの会場整理で、記念碑から五十米ほど離れた桜並木の沿道に立って押し寄せる人たちを道路に出てこないように整理していた。

除幕式の式典が終って、招待客たちは祝賀会場である金木中学校へと移動をはじめた。大勢の観衆も散りはじめた。

式典実行委員に案内されて祝賀会々場へ移動のため歩いてきた美知子夫人が目の前まできた時、「ご苦労様です。」と私は道端から声をかけた。ハッと立ち止まって、一瞬驚いたように私の方を見た。そして、「ああ、あの時の……。太宰は疎開していたあの頃が一番心安らぐ日日でした。―お世話になりました。ありがとうございます。―」

深々と頭を下げてから祝賀会場の方へと去って行った。

（注）長女園子さんは、昭和三十九年から、駐仏日本大使館に赴任していた上野雄二（現津島雄二厚生大臣）氏と結婚してフランスのパリに在住していた。

Ⅱ除幕式の写真提供は、金木町教育委員会Ⅱ

（一九九九年十一月記）

短歌の部

ひば美林

岩田重美

北帰行

白川哲子

文芸らん

子の許へ移りて余生送らむと

思へど決めかね庭の草引く

消し難き一行なれば

軍歴を逆らふことなく履歴書く

ひば美林宝庫と言はれし

我が町の営林署廃止にさき行き不安

舗装路の路肩を割りて

虎杖の芽吹く力にわれもあやからむ

応対の売り子の一言気に入りて

「太宰」の色紙われも買ひたり

村社三十三俵飾られて

二千年の世を寿ぐさまに

娘の便りヘルパー奉仕週三日

それぞれのくらし身につまさと

農業に見切りをつけし人多く

荒地となりぬ良田のあまた

山峡の棚田の水は輝きて

田毎に流る自然のままに

早春の田面に輪となり白鳥ら

北帰行の時を待ちしか

春紅葉

木下 加津恵

兄逝き給ふ

菊地 美絵

春紅葉かがよふ谷を幾曲り

大株の独活夫とわが摘む

ラベンダーの咲く道車ひた走る

兄の手術の不安の中に

子の如き医師凜として血糖値

未だ下げ得ぬわれを叱りぬ

五時間の長き手術を終へて来し

ベットの兄に声なく対す

遠見ゆる夜の刈田に藁を焼く

炎連なり闇を舐めゆく

死にはせぬと見舞ひし吾の手を取りて

笑み給ひたる兄は逝きたり

学び舎に苛めなどなき事希ひ

孫の声聴く夫と替りつ

わが兄の柩の燃ゆる音のしてうつつに

息吸ふわれは悲しも

冬支度急げと今は亡くき

母の口ぐせ憶ふ窓打つ雨に

喪の服を脱ぐとき涙溢れ出つかく

逝く兄と思はざりしに

刺し子

櫛引 八千代

妙なる調べ

原田 喜一郎

うららかな春の日差しに幾十度

火の粉くぐりし「刺し子」乾しやる

過ぎし日に郡界越えし撫林の

倒木にあまた月夜茸見き

華やぎも失せてその瞳に

何映らむ惚けゆく姑の跡を洗ふ

歌詠まむと思へど詠めず窓繰れば

雁の一群渡り行く見ゆ

冬枯れに老いゆく孤愁癒さむと

翁は古きアルバムを繰る

吹き鳴らす笛の音直ちに消ゆるとも

妙なる調べこよなく愛す

ひと里をはなれし峽の山宿を

深ぶか沈め青葉雨ふる

刎頭の友逝きしより早や十年

吾は八十路の峠を越えたり

起立して校歌唄へば眼裏に

ありし日浮かぶ夜の学舎

茸藁とふドグダミ妻は小まめにも

蔭干しはじめお茶の代りと

川柳の部

弥次郎兵征

高橋 けん一

すすき

成田 子セ

弥次郎兵衛たんと言いたいことがある

跳ね終えてごろっと一升びんになり

演歌より軍歌が哀し二等兵

昭和史の彩りも添え津軽三味

青胡桃寂しい地図を抱くなかれ

辛抱もダンスへ入れて嫁がせる

いい人が不幸になっていく不思議

繁盛は客へ頭がよくさがり

なす・きうりみんなうまくて妻がいて

お月さますすきの手話が見えますか

文芸らん

文芸らん

ひと休み

鳴海 春光

迎い火

中西 昭治

ひとり逝き一人生れて輪廻の灯

夫の下駄揃え迎い火焚いている

草取りの帽子に蝶もひと休み

せっかちな男電池をすぐ切らし

金と暇やっと揃えばボケが来る

脱がされた上着貰って午前様

街角の募金善意の輪をつくり

妻と居て云うこともなし手酌酒

五年目の結婚指輪ぬけたがり

陽だまりで老いの甲羅を干している

土に生き

岩田しげみ

そこだけに遊ぶ風あり光りあり

土に生き土の匂いそのまま寝る

片想い告げることなく香を焚く

選挙戦三枚舌はよく売れる

子が親になって子と来る夏祭り

眉の月

櫛引八千代

胃に落ちた酒に迷いを聞いて見る

裏切りを重ねて生きた小指です

鮎焼いてこれからのこと過去のこと

思慕抱いてぐらり傾く眉の月

抱き癖のついてしまった宝もの

七ツ星

泉谷てい女

赤貧のあの日を耐えて今がある

花好きの亡夫を偲んで水をやる

亡母と見た遠いあの夜の七ツ星

神仏を拝めば邪心逃げて行く

生きている幸せ庭の四季の彩

母の貌

白川哲子

菓子折りを持って無沙汰をわびて来る

三味線のこけら落しの撥さばき

二度三度修羅をくぐった母の貌

人の世は千差万別われは吾れ

少年法謎とき出来ぬ子がふえる

ほしい雨

小山内 トモ子

霧の中

葛西敏江

水仙を君にたとえて春を待つ

霧の中ほどよく濡れる影二つ

又増えた白髪かくしに苦戦する

思い出の博多帯して踊りの輪

春うらら竿売りの声ゆったりと

コスモスの中で拾ったときめきを

午前さまぬき足さし足忍び足

美人画の団扇を持てば待つ心

時々雨がほしいと蛙鳴く

神籤結うきみの瞳を傍らに

俳句の部

旅の夜長

峰 秀女

おぼろ夜

沢田政孝

酔ひほのと旅の夜長の艶ばなし

葉に乗りてたちまち青くなる蛙

野菊咲く里を沈めるダムの村

おぼろ夜の一人に道は広過ぎて

ひと恋ふやランプの宿の星明り

烏賊売りの雪もて墨の手を洗う

夕星の煌めきひとつ秋すだれ

寒林に声上げ犬を呼び戻す

焚火の香まとひしままや厨事

ふらここや少女のリボン蝶になる